

笠井潔

ウオーズ
戦争
ヴァンパイヤー

10

魔神ネウセンプの覚醒

KADOKAWA NOVELS

クレムリンの恐るべき権力抗争に
まきこまれた九鬼。勝利者が掌中にするもの
SF伝奇アクション



ガクワパベルズ

昭和六十三年九月二十五日初版発行

著者 笠井潔 かさい きよし

発行者 角川春樹

ヴァンパイヤー戦争 ウオーズ 10

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社大谷製本

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二二三 振替東京三一九五三〇八

千〇三 電話 営業〇三七八七八五三 編集〇三七八七八四五二

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-04-771610-3 C0293

笠井潔

戦争 ウォーズ ヴァンパイヤー

10 魔神ネウセンプの覚醒

KADOKAWA NOVELS

クレムリンの恐るべき権力抗争に
まきこまれた九鬼。勝利者が掌中にするもの
SF伝奇アクション

角川

NOVELS KADOKAWA

●作者のことは

雑誌「野性時代」に、完結巻として『ヴァンパイヤー戦争10』を書きはじめたら、たちまち新書版で二冊分の量にまで膨脹してしまった。

九巻分の加速度とは怖いものだ。

頭でいくらブレーキを踏んでも、筆の方がとまってくれない。

やむなく、前半部分を第十巻として刊行することになった。

後半部分として刊行される第十一巻で、今度こそ『ヴァンパイヤー戦争』は完結します。

略歴 一九四八年東京生。処女作『バイバイ・エンジェル』で角川小説賞受賞。ミステリー、SF、評論の分野で活躍。

1610-3 C0293 ¥680E

価680円



ガクカ / ヘルズ

昭和六十三年九月二十五日初版発行

著者 笠井潔 かさいきよし

発行者 角川春樹

ヴァンパイヤー戦争 ウオーズ
10

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社大谷製本

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見三三三 振替東京三一九五〇八

〒100 電話 営業部三三八七八五三 編集部三三八七八五二

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-04-771610-3 C0293

KADOKAWA NOVELS

ヴァンパイヤー戦争 ウイーズ 10

魔神ネヴセシブの覚醒

笠井潔

— 絵・本文イラスト／生頼範義

序 章 ブリエント湖畔から

11

第一章 ミルチャ・ミリエールの死闘

17

第二章 マリア・クルチコワの復讐

49

第三章 ヴェーラ・ボゴレーロワの脱走

103

第四章 ミハイル・グリゴレンコの告白

148

第五章 アレクセイ・リユーミンの依頼

177

終 章 赤倉岳洞窟へ

215

第九卷までのあらすじ

パリで無頼の生活を送る九鬼鴻三郎は、N.A.S.A 宇宙通信基地爆破事件の鍵を握る美少女キキをめぐり、国際諜報謀略戦に巻き込まれた。死闘の末キキを救い、彼女の体に流れる「吸血鬼」の血の秘密を知る。

太古、地球に飛来した「光明神ラルーサ」の戦士ヴァー・オウは理想郷ムーを築くが、「暗黒神ガゴール」の攻撃を受け、ムー大陸は海底に沈み、ヴァー・オウ自身は長い眠りについた。

ガゴールが月面に遺した超空間通信用ワイプ・スクリーンが発見された。これこそ日本神話に三種の神器の神鏡として語られ、残る通信器「神玉」、アンテナ「神剣」を求め死闘が開始された。

敵として出会った蒔恵に救われた九鬼は、自分が日本ヴァンパイヤー族「古牟礼民」の一族であると知る。その後、法隆寺に隠されていた神玉を奪取、熊野に向うが、ヴァンパイヤー族抹殺を図るKGBによって、村は潰滅していた。

神剣は八ヶ岳山中で、九鬼の妹、山城真稀子に守られていた。だが、礼部一族の襲撃を受け、真稀子は囚われ、ただ一人、神剣の手掛りを握る九鬼の養

父もまた拉致される。九鬼は養父を救出、神剣をも手に入れるが、悪鬼が現われ、剣は奪い返される。

九鬼は礼部の居所を求めキキとともに石堂栄太郎の山荘を襲撃した。悪鬼との死闘でキキは谷底に消え、九鬼は後から襲ってきたKGBにとらえられ、礼部のクーデター計画を知る。戦乱の日本を潜水艦で脱出し、神剣と神宝を守りパリへ渡った九鬼。

パリでも九鬼は、神剣の行方をめぐり街を血に染める凄絶な戦いにまきこまれた。すべての謎は、西アフリカの新興独裁国ブダールの奥地にある秘境「女呪術師の国」につながっていた。

ムラキと共に九鬼はブダールに潜入した。だが、CIAの企むクーデターで反乱軍に追われる独裁者ケビゼたちは、奥地へ逃亡する。トゥトゥインガ族と共に独裁者の軍隊を殲滅した。彼らは「神鏡」を求め灼熱の砂漠を越え、秘境「ブドゥール」への苛酷な旅に出た。

ブドゥールでも、王位をめぐる内戦にまきこまれ「古代の戦い」が凄絶に展開された。そして、ついに、三種の神器を掌中にした九鬼は、ルビヤンカの地下監獄に突入した。

登場人物紹介

九鬼鴻三郎くきこうざぶろう

暴走族、右翼暴力団三兵衛、KGB、過激派テロリスト無差別爆撃犯…を経て破壊の凡てを体得した（殺人機械）。偶然にヴァンパイヤー一族の一連の事件に巻き込まれ、自らの出生の秘密を説き明かしつつある。

ラミア・ヴィンダウ 愛称キキ。ルーマニア系ヴァンパイヤー族の中でも最も純粹にゾルーカを受け継ぎ、ヴァーオウの蘇生の鍵を握る美少女。

ミルチャ・ミリエール ムーの神官の末裔。キキの危機を幾度となく救ったヴァンパイヤー。

ステラ ミルチャの一人娘。

スペンネフ ソ連の魔術顧問。KGB、ソ連国防軍超能力研究組織を操り、宇宙の恐怖たる真の神、ガールもラルーサも超える根源の神の蘇生を企てる。

彼の目的は人類の爆発的な霊的進化であり、一九九九年の大破局こそその引き金となると予言する。呪われた魔人。

水城詩恵みづきまきえ 二千年にわたって礼部一族と戦い続ける日本の真の主権者。古牟礼民の女性リーダー「真ノ木」。ムーの神官の末裔であり、ゾルーカを宿す。

クルチコワ三姉妹（ナタリア、マリア、リーザ） 強力なサイ・パワーをもつ三つ子の魔女。スペンネフの愛弟子。

リューミン 大いなる野望を抱く天才的な陰謀家。KGB首相でありソ連首相代理。

ヴィーラ リューミンの情婦であり、モスクワの有名なバレエ団に所属していた謎の美女。

ムラキ かつて「聖戦国」を結成したが、この組織を操っていたネクラースフに復讐を誓う。パリで九鬼と共に死闘を演じ一緒にブダーに入国。

序章 ブリエント湖畔から

ベッドのなかで、静かに寝返りをうつ。シーツにくるまり、もう一時間以上も大人しくしているのに、どうしても眠ることができない。

あきらめて眼をひらくと、室内の様子がぼんやりと浮きあがって見えた。真夜中のことで、寝室には明かりがない。こんな暗闇でも、キキは、壁紙のこまかな模様まで自分の眼で見わけることができる。ヴァンパイヤーは、猫よりも夜目がきくのだ。

眠れぬままに、とりとめない思念を追いはじめた。キキの瞳は、夜行獣みたいに金色に発光している。

先週のことだ。スペシネフの罾を逃れて、ジェコファカの山荘に隠れていたキキは、館の主人である共産党政治局員のデニーキンから、用意した高級リムジンに乗るように命じられた。いまや少数派に転落

した書記長グリゴレンコが、カウンター・クーデタという大博打に乗りだしたというのだ。

以前からデニーキンは、反グリゴレンコ闘争の同志であるロコソフスキー元帥に依頼して、キキのため非常脱出のルートを準備していたらしい。車には、国防軍参謀本部の〈情報管理本部〉に籍があるという若い少佐が同乗した。マクシーモフという少佐は運転手に命じて、ジルを猛烈なスピードで走らせた。

KGBのクーデタ軍に占拠されている市内を避けるように、車はモスクワ郊外の森や畑や荒地を抜けて疾走した。二時間後には、目的の軍用空港に到着する。

空港には、すでに中型の軍用輸送機が待機していた。マクシーモフ少佐の先導で、キキは機内に乗った。GRUが手配した特別便らしく、乗客は二人きりだ。

輸送機は、一路ベルリンをめざして飛行した。その日の夕方には、キキと少佐はベルリンの壁に到着していた。若い少佐は、パスポートや現金、それに

西ベルリンに入るための通行証などを手渡し、別れの言葉とともにキキの背中を押した。

こうしてキキのソ連脱出作戦は、無事に終了したのだ。筋書きを書いたのがGRUなのだから、それも当然だろう。西ベルリンから古呂風太に緊急連絡を入れると、翌朝には風太の部下が、ホテルまで迎えにきてくれた。そして案内されたのが、ここ、ブリエンツ湖畔にある古城だった。

古呂風太と九鬼貢はパリで、室田玄有とムラキはジュネーブで、正統日本政府のため極秘の任務に着いている。だからいま、百名からの警備隊とともに古城に滞在しているのは、ジルベルト、ステラ、そしてキキの三人ということになる。

アルプスの谷間に隠されていた宝玉と宝剣は、ふたたび掘りだされ、宝鏡とともに古城の地下室に安置されていた。KGBもCIAも、そこに亜空間通信装置があることは知らない。

いや、どこからか嗅ぎつけたとしても、この連中には打つ手がない。機関銃や携行ミサイルで武装し

た百名の警備兵にくわえ、不死身のヴァンパイヤーであるキキが三種の神器を守護しているのだ。

アメリカもソ連も、永世中立国のスイスを、まさか軍隊で蹂躪するわけにはいかない。おまけに、国際世論の囂々たる非難は承知のうえで、亜空間通信装置を奪取するため師団規模の兵力を送りこんだとしても、この作戦が成功する保証などないのだ。

キキは、ミルチャとともにモスクワ郊外の森で、ジェルジンスキー師団の機甲部隊を壊滅させたという実績がある。米ソに可能なのは、核攻撃だけだろう。

それぞれ東西ドイツの基地から、ブリエンツの古城に中距離ミサイルを撃ちこむことはできる。だが、それでは亜空間通信装置も破壊されてしまうだろう。つまり米ソには、核攻撃という最後の手段も禁じられている。

キキと叔母のジルベルト、ミルチャの娘ステラ。

この半年以上、地獄のような修羅場を駆けぬけてきた三人には、信じられないほどに静かな日々が流れ

ていく。

古いルーマニア貴族のヴィンダウ家も、どうやら
（ピアートル・チミアール）
石塚村のヴァンパイヤー一族の出身らしい。
とすれば、ヴィンダウ家の叔母と姪、そしてミ
リエール家のひとり娘の三人は、遠い親類同士とい
うことにもなる。

国際諜報組織の手で、父だけでなく弟までを、無
残に殺害されたばかりのキキだ。静謐なブリエンツ
の古城で暮らすうちに、ステラがじつの妹のように、
ごく自然に感じられてきた。奪われた弟に代わる、
新しい妹と奇跡的に出遇えたという幸運。ひそかに
キキは、この幸運に感謝していた。

しかし、美しい自然のなかで新しい家族にかま
れていても、キキがほんとうに穏やかな気持になれ
たわけではない。昨夜も食事のあとは、ジルベルト
やステラと沈鬱な言葉が交わされた。

「ラミア姉さん。どうしていつも、そんな悲しそ
うな顔してるの」

ステラの問いに、キキは薄くほほえんで答えた。

「なんでもないのよ」

「あの人のことを考えているのね」

美しい眉をひそめるようにして、ジルベルトがい
う。ステラが続けた。

「日本で、悪魔の虜になつていたあたしを、命がけ
で助けてくれた人ね」

「心配ないわ、キキ。コーもミルチャも、まもなく
ブリエンツに戻ってくるはずだから」

「でも罨なのよ。あの陰険な男、スペシネフがしか
けた罨。あいつは、わたしを餌にして、コーをルビ
ヤンカにおびき寄せたんだわ。わたしが、モスクワ
郊外の別荘に隠れていることを知らないで、あの
人は……」

「大丈夫よ、父さんが一緒なんだもの。父さんは強
いわ、地上の誰よりも強い。明日にも二人で、あた
したちのところに戻ってくるはずよ」

キキは、静かに肩をすくめた。父親を信じるステ
ラの子供らしい気持に、疑念を生じさせるわけには
いかない。

ミルチャは地上最強のヴァンパイヤーだが、魔人スベシネフの穢れた靈力は、孫のミルチャよりもさらに強力なのだ。そのことをキキは、雪に埋もれた「石塚」村で魔人と対決したときに、したたかに思い知らされていた。

……いまならば、と思う。いまならば自分の手で、あの魔人を打ちたおせるかもしれない。

夏からの一、二か月で、サイ・パワーが急激に高まりつつあることを、キキは内感していた。モスクワでは、デニーキンという老政治家の強力な意思を、思うままに操ることさえ可能だったのだ。以前のキキには想像することもできない、強烈な精神感応力が生じていた。

精神感応力だけではない。いまでは、念じるだけで物体を動かせる力まで身につけてきていた。最初は卓上の鉛筆を、かろうじて転がせるくらいだったが、いまでは大食堂の重たい食卓でも、天井まで浮きあがらせることができる。

念動力は、日々、加速的に強まってくるようだ。

反応のない物体でも、翌日には凝縮された思念に押され、じりじりと動きはじめ。この調子でいけば、いつかは、湖畔の古城さえ宙に浮かせることができるかもしれない。

ベッドからおり、ナイトガウンをはおる。足音を忍ばせて、寝室をでた。昨夜のステラの言葉がふと思ひ出されたのだ。

「ラミア姉さんなら、きつと、ガゴールの神器をあやつれる。父さんは、ロシアに行くまえに、洩らしたの。……これを星間通信装置として使うのは、ヴァーオウでなければ不可能だろう。しかし地上で、特殊な兵器として使うなら、自分にも操作可能かもしれない。ここに帰ってきたら、実験してみたいものだ。」

こんなふうに、ひとりで呟いていた。父さんじゃなくても、ラミア姉さんにはできるかもしれない。だっていつかは父さんよりも強くなるという、誰よりも濃い不死の血をさすけられたラルーサの娘なん

だもの」

どうせ眠れないなら、亜空間通信装置を研究してみるのがいい。キキは日本で、おぞましい怪物ドゥゴンの触毛を殺すため、宝剣を作動させたことがある。いまなら宝剣だけでなく、宝玉も宝鏡も、テレパシーで作動させることができるかもしれない。

どんなつもりでミルチャが、「可能な地上兵器」という言葉を使ったのかは不明だ。しかし、亜空間通信装置の三パーツを同時に作動させることができれば、ミルチャの謎めいた言葉の意味も判るようになるかもしれない。

階段をおり、地下室の重たい扉を押しあける。そこはがらんとした石畳の広間で、建物の地上部分とは違い、近代的な改装はほどこされていない。中世さながらの、陰気で黴臭い地下広間だ。とうぜん照明はないが、キキは気にもならない。

広間の奥にある石壇に、宝玉、宝剣、宝鏡が安置されている。石壇のまえに立ち、三種の神器をそれぞれ、熱心に観察しはじめた。

しばらくして頷くと、まず宝玉を手にとり、広間の中央に運んだ。次に宝剣、そして宝鏡。慎重な手つきで、三パーツを石床に横たえる。それから、またしばらく黙考した。

……これではいけない。配置が違っている。

そんな気がして、三パーツの位置をあれこれと変えはじめた。キキが満足そうに微笑したときには、剣は尖端を北にむけ、玉は東に、鏡は西に置かれていた。となれば、どこに自分が位置すべきか、結論は明瞭だろう。

大雑把に南の位置まで行き、静かに体を移動させはじめた。微細な心の網が、なにかに反応しはじめる。ここだ、このあたりに違いない。

魚の入った網を絞るように、静かに念を集めはじめた。かすかだが、たしかな手応えがあった。

不意に、宝玉、宝剣、宝鏡が青白い炎をまとう。ほのかな冷光に、地下室の壁や天井が、ぼんやりと浮かびあがった。

さらに網を絞る。意識の焦点をあわせ、体内に脈